

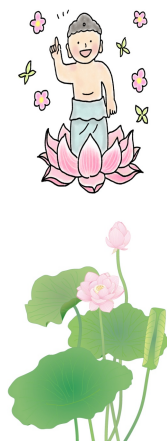
じょうこうじ 掟光寺だより

令和4年
5月号

行事案内

●5月9日(月)
「花祭り」

13時30分から



仏教たとえ話

【四門出遊】

お釈迦さまがまだ釈迦一族の王国、カピラ城の王子だった頃の話。お名前は「ゴータマ・シッタルタ」と言いました。シッタルタ王子は宮殿で何不自由ない生活をしていました。

ある時、シッタルタ王子は城外に出たいと思い、父親である王さまの許しを得て東の門から出ました。そして、馬車に乗って庭園に向かう途中、ある男に出会いま

した。

頭は白く歯は抜け落ち、痩せ衰えて腰の曲がっていました。王子はびっくりして御者(馬を扱う者)に「どうしてあの人はどうしてこんな姿をしているのだ」と尋ねられました。

「王子さま、これは老人というものです」

「どうして老人というのか」

「人は年を取ると皆このようになり、余命いくばくもなくなりませぬ」

「私もそうなるのか、それは免れることはできないのか」

「王子さま、生きているものは皆、老います。これはどんなに偉い人でも免れることはできません」

王子はこれを聞いて、すっかり気が沈み、遊びに行く楽しい気分は消え失せてしまいました。

またある日、二度目の外出をする事になり、今度は南の門から



出ました。

その途中、ある男に出会いました。身は痩せ細り、顔は黒ずんだ一人の病人が、自分の汚物にまみれて苦しんでいました。

王子は尋ねると、御者は「これは病氣というものです。人は誰しもいつか必ず病氣になります」と言われ、王子は楽しもうとする気持ちはずっかり無くなりました。



別のある日、三度目は西の門から出る事になりました。途中で横たわって動かない人に嘆き悲しみ人たちがいました。

王子は御者に「これは何というのか」と尋ねられました。

「これは死人というものです」

「死とはどういうものか」

「死はいのちが尽きることで、二度と親兄弟を見ることはできなくなります」

「私もそうなるのか」

「その通りです。生あれば必ず死があります。人はそれを選ぶことはできません」

王子はがっかりとしてしまい、馬車を城に引き換えさせました。

そして、またある日、四度目の

外出は北の門から出ました。その途中、清々しく神々しい人を見ます。衣を身にまとい、鉢を手にして歩いていきます。

王子は「あれはなんだ」と聞かれると、

御者は「あれは出家した僧です。僧とは人間の欲と情愛をすべて断ち切った人で、何事も惑わず、憂えることも楽しむこともない境地にある人です」

これを聞いた王子は、きっとここに救いの道があると思い、出家を志しました。



このお話はお釈迦さまがなぜ出家をしたのかで有名な話です。

老病死が避けがたいものと分かっているにも、真つ直ぐに生きる心を育む大切さや、また、そんな中でそもそもなぜ生きるのか、本当の幸せとは何か？を私たちに問いかけるお話でもあります。

